



Title	スワヒリ&アフリカ研究 第36号 執筆要項/執筆例
Author(s)	
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2025, 36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

執筆要項

1. 内容

論文、研究ノート・資料、書評、報告など。

2. 掲載の可否

論文については、査読を経た上で編集委員会が掲載の可否を決定する。その他の原稿については、編集委員会で検討した上で可否を決定する。

3. 原稿の形式

- 1) A4 のワープロ原稿
- 2) 原稿余白: 上余白 = 25 mm、左右余白 = 25 mm、下余白 = 30 mm
- 3) 字数、行数: 1 行 42 字、1 頁 30~35 行、図表を含めて 20 頁程度に収め、完全版下のファイルにすること
- 4) 文字の種類と大きさ
 - ① 全角文字(和文)は明朝体、半角文字(欧文・数字)は Times New Roman とする
 - ② 題名は 14 ポイント、副題および氏名は 12 ポイントとする
 - ③ 見出しへは 12 ポイントで 0., 1., 2., 3....、小見出しへは 11 ポイントで 1.1, 1.2, 1.3... とする。
 - ④ 本文は 11 ポイントとする
 - ⑤ 引用・註番号は本文中右上 $\frac{1}{4}$ 角文字(半カッコ付き)、脚注文は 10 ポイントとする
 - ⑥ その他、和文は全角文字、欧文は半角文字
- 5) 引用・註記は脚注とする。他著作を引用・言及する場合、「著者名、年数、ページ数」をそれぞれの引用・註記末に()内に記す。その文献名は同じく原稿末に参考文献として著者の姓のアルファベット順に列記する。
- 6) 参考文献の記載は下記の例にしたがう。
 - ① 単行本の例

Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York, Henry & Holt Co.
今西錦司. 1972. 『動物の社会』思索社.
上田富士子. 1999. 「女たちの世界」川田順造(編)『アフリカ入門』pp.65-96. 新書館.
 - ② 雑誌の例

Sapir, Edward. 1925. "Sound Pattern in Language." *Language*, 1, 37-51.
前嶋信次. 1966. 「テリアカ考—文化交流史から見た一薬品の伝播について」『史学』38(4), 1-39.
 - ③ 論文集は、雑誌の記述例から巻数を除き、ページ数の後に発行社名を追記する。
 - ④ 同一著者の著作物が1年に2点以上ある場合は、1981a、1981b のように区別する。
- 7) ページ番号は打たない。
- 8) 題名、著者名、所属には欧文表記を併記する。それらを含めて、表記の仕方は、執筆例の頁(「日本におけるスワヒリ研究について」)を参照のこと。

4. 原稿締切期日は毎年 10月31日。ファイルをメールに添付して編集委員会のアドレスまで送付する。編集委員会アドレス swahiliandafrica@gmail.com

日本におけるスワヒリ研究について — 現状と展望 —

On the Swahili Studies in Japan: Current Status and Issues

斯瓦希里 語郎*

Swahili, Goro

0. はじめに

スワヒリ語は、現代世界において使用人口（約 7 千万）¹⁾、使用地域（国語・公用語とする東アフリカ 3 カ国を中心にその周辺 10 数カ国の隣接地域）、またそこから由来するところの大きな国際性²⁾と重要性を有するにもかかわらず、

1. 日本におけるスワヒリ研究の現状

1.1. 研究機関

書式設定の例

A4 縦 横書き

上余白：25.0 mm

下余白：30.0 mm

左余白：25.0 mm

右余白：25.0 mm

1 行字数：42 字

1 頁行数：30～35 行

なお、本学の「スワヒリ語学」講座は本邦唯一の講座であり、その使命とそれに寄せる期待には大きいものがあろうと思われる。

* 大阪大学大学院人文学研究科教授 (Graduate School of Humanities, Osaka University)

¹⁾ ただし、この中で母語話者が占める割合は 10 数%にしかならない。

²⁾ 大湖地域でのリンガフランカにしようという声や、アフリカ連合での共通語にしようという声も上がっている。また、欧米やアジア諸国の放送機関でも「スワヒリ語放送」を行なっているところは多い。